

ケネディの予言、再び

新興技術で揺らぐ核抑止力

第4回



米ソスパイ合戦

あいかわ
会川

はるゆき
晴之

(毎日新聞客員編集委員)



いまから40年前の1985年、東西冷戦まった中の米国で大物スパイの逮捕が相次いだ。18年間の長期にわたり米海軍の極秘情報をソ連に提供していたジョン・ウォーカー元海軍准尉、もう一人は、米国のスパイ機関、国家安全保障局（NSA）で働いた経験を持つロナルド・ペルトン元分析官だった。2人は、米国が築き上げてきた対ソ戦略の秘密をあつさり売り渡し、米国の優位性を崩してしまった。

焼きかけのハンバーク

ワシントンのソ連大使館に勤務するKGB職員が、3人の屈強なロシア人ボディーガードに囲まれワシントン近郊のナショナル（現レーガン）空港に姿を現したのは1985年5月22日のことだった。

異様な風体の一団は、83年から在米ソ連大使館に勤務していたアレクセイ・トカチェンコ3等書記官と、その妻と2人の娘。ニューヨークとカナダのモントリオールで乗り



ウォーカーやベルトンがKGBとの接触場所に使ったオーストリアの首都ウィーン。東西冷戦中は「スパイの町」としても知られた＝筆者撮影、2011年12月

継ぎ、モスクワに向かうチケットを握りしめていた。

その3日前の晩、米連邦捜査局（FBI）捜査官はこのソ連外交官が乗る車をワシントン郊外で視認していた。そこは、スパイへの報酬を置くと思込んだ場所。現行犯逮捕しようと身構えていたが、いつもと様子が違うと感じ取ったのか、ソ連外交官はカネを置かず立ち去ってしまう。

絶好の機会を逃したFBIは、空港で書記官一行を苦々しく見送り、直後に外交官の自宅を搜索する。キッチンのコンロには焼きかけのハンバーガーがフライパンの上に残っていた。面倒な外交問題に発展する前に、一刻も早く家族を国外に逃そうとソ連が焦った様子が浮かびあがる。

ウォーカーがスパイの世界に入ったのは67年のことだった。首都ワシントンから車で4時間南のバージニア州ノーフォークの海軍潜水艦司令部に勤務するまだ30歳の通信士だが、大西洋に展開する米海軍の潜水艦の通信をすべて聞ける権限を持っていた。

妻と4人の子供を抱えるが月収はわずか725^{ドル}。この苦しい生活から脱するには「トップシークレット」の情報を売るしかない。そんな思いを胸に、67年10月1日、車をワシントンに向けて走らせた。

ソ連の在米大使館はホワイトハウスに近いワシントン中心部にある。ウォーカーは大使館から数ブロック先で車を止め、タクシーで大使館の近くに向かった。迷った末、勇

気を振り絞って大使館に駆け込み「安全担当者に会いたい」と告げた。対応した職員に「極秘情報を売りたい。サンプルを持ってきた」と手渡した。

その中には、米軍の暗号文を平文に直す際に使う「キー」も含まれていた。これがあれば、米軍の暗号通信を解読可能となる。大西洋に展開する米原潜の運用状況や、各潜水艦の使命などを書いた資料も含まれていた。

職員は大使館勤務のKGB職員に取り次ぐ。資料を一目みて「これは本物だ」と判断する。だが、ロシア人は「頼みもしないのに贈り物を持つてくる人」を疑う習性がある。白昼堂々、大使館にやつてくる米国人はかなり怪しい。米国が仕掛けた「ワナ」かもしれない。

「目的はなんだ?」。KGB職員は2時間にわたりウォーカーに質問を浴びせた。ウォーカーは、共產主義思想やソ連への傾倒などは一切、口にせず「カネが欲しい」とだけ答えた。純粋なビジネスとの理解を得られたウォーカーは、この日、報酬として数千ドルを手にする。さらに、今後は月給4000ドルの支払いも決まった。詳しい打ち合わせのため2週間後にワシントン近郊のショッピングセンターで会う算段を整えた。

打ち合わせ終了後、ウォーカーは丈の長いコートとつばの広い帽子をかぶらされる。さらに、大男たちに囲まれながら車の後部座席に押し込まれた。監視や追跡を逃れるた

めか、車はワシントン市内を走り回った。「解放」されるまで1時間ほどドライブは続いた。

以後、ウォーカーのスパイ活動が始まる。ソ連が与えた小型カメラで書類を写し、そのフィルムを渡すことを繰り返した。直接接触は海外のみで、そのほとんどがウィーン。情報提供と報酬の支払いは年2回だった。

情報の受け渡しは、お互いが顔を合わなくて済む「デッドドロップ」という手法を使った。ウォーカーが事前に指定された場所に資料を置き、ソ連がこれを回収する。カネの受け渡し場所も、同様に事前に指定されている。ソ連が報酬を置き、ウォーカーがそれをピックアップする。資料やカネを双方が置いた後に「用意が調った」という目印を設けることにした。道路の右端に置いたセブンアップの缶が、その合図だった。受け渡し場所は、ソ連大使館職員が米当局に事前に申請せずに自由に歩き回れるワシントン周辺25マイル内に設定された。

夫の金回りが突然よくなったことに妻バーバラは疑念を抱き始める。軍から盗み出した極秘資料を整理するため、勤務先に宿泊する回数が増えたことで、妻は夫が「浮気しているのでは」と疑い深めた。家中を探し回ると、夫が隠し持っていた海軍の極秘文書が詰まった袋が見つかる。KGBは「妻や家族には決して明かさないうように」と厳命していたが、動かぬ証拠を前に、夫は「スパイをしている」

と認めざるを得なかった。

妻が当局に密告されてはたまらない。そうした事態を避けるため、ウォーカーは妻を共犯者とするを思いつく。デッドドロップに妻を同行させた。妻は、丸められていた50^{ドル}紙幣を帰宅後にアイロンをかけて平らにする作業も担当した。

「スパイの輪」ひろがる

ウォーカーは現役の海軍下士官であり、軍艦への乗船勤務を含めて転勤も多い。通信士育成の教官役を務めたこともある。この期間は極秘情報にアクセスする立場から外れたため、ソ連からの月給は半額の2000^{ドル}に減額されてしまった。これでは持続可能性に欠ける。そう思ったウォーカーは「仲間」作りに励み出す。

手始めに通信士学校で教えた生徒のウィットワース通信士にアプローチする。元海軍士官で、退役後は防衛産業で働いていた兄アーサーも巻き込んだ。システムを築き終えた76年、ウォーカーは20年勤めた海軍を辞め、妻とも離婚した。退役したことで「スパイ活動からも足を洗った」と妻に思わせることができるとも考えていた。

その後は情報収集を「部下」たちに任せた。私立探偵業を営みながら、年2回のデッドドロップへの資料投下を続けた。年に1回はウィーンを訪問してソ連と直接接触した。

航空機はいつもファーストクラスで、宿泊も五つ星ホテルを使った。ただ、ウィーンでの接触は、芯から冷える極寒の1月であろうとも、米国からの監視を免れるためいつも屋外だった。

散歩をしていると、背後から「ハロー ディア フレンド」との声が響く。それが接触の合図だった。ウォーカーは極秘文書を渡し、ソ連側は報酬などを手渡した。

アイビーベル作戦

米国もソ連の機密情報を盗み出そうと懸命の努力が続けた。その一つが、原潜を駆使した深海での情報収集だ。その代表的な例は、海軍、中央情報局（CIA）、NSAの3者合同で取り組んだ「アイビーベル作戦」だった。

きっかけは68年3月にハワイ北西沖の太平洋で沈没したソ連のディーゼル型潜水艦「K129」事故だった。K129は3発の大陸間弾道ミサイル（ICBM）や核魚雷を積む。ソ連は回収するため死に搜索したが、沈没場所が特定できずに断念した。一方、米国は太平洋に張り巡らしていたSOSUSのおかげで、おおまかな沈没地点を把握していた。

米軍は、特殊任務専門の原潜「ハリバット」を現地に送り込んだ。水深数千^{メートル}の海底をハリバットが放った無人潜水艇「フィッシュ」でくまなく探す。搜索を始めてから3



流氷を押し分け、ゆっくりと航跡を描きながら進む観光砕氷船。米海軍はこのオホーツク海で10年以上もソ連通信ケーブルの盗聴を続けた。＝北海道網走沖で2019年

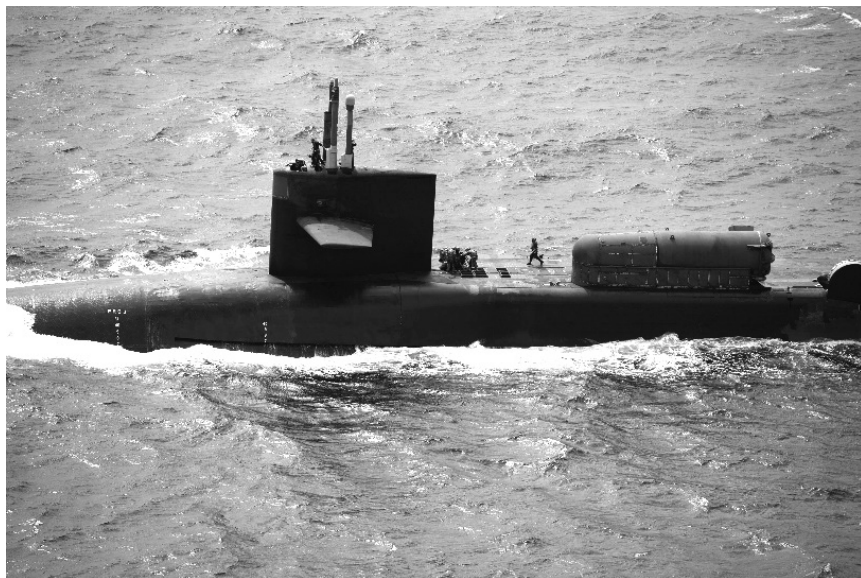
週間後、沈没したソ連潜水艦K129の姿をカメラが捉えた。後に、米軍はこの潜水艦の一部を引き上げた。

この手法は、他の用途にも使えるはずだと米海軍は考え始める。まずは、ソ連太平洋艦隊の司令部があるウラジオストクとカムチャツカ半島のペトロハバロフスクの原潜基地を結ぶオホーツク海の通信ケーブルを深海から探し出し、盗聴器を仕掛ける作戦を試みる。

71年10月、ハリバット米西海岸の基地を出航、千島列島を抜けてオホーツク海に入った。まずは、ケーブルのありかを探しあてなくてはならない。情報などあるうはずもない。あえて言うなら、担当した情報将校が若い頃、米国のミシシッピ川を川下りしている時に「この地点に電話ケーブルあり。ここに錨を降ろすな」と書かれた標識を見た記憶が唯一の情報と言えた。大切なケーブルを錨で切断されてはたまらない、そんな思いはソ連にもきつとあるはずだという思いだけを頼りに探索作業が始まった。

ハリバットはカムチャツカ半島沿いを、潜望鏡を出しゆっくりと航行した。ソ連潜水艦の追跡を警戒し、3時間ごとにS字や8の字を描くように航行して後方を確認した。

1週間がたったころ、「ケーブルあり。停泊しないこと」の書いた標識をようやく見つける。無人潜水艇「フィッシュ」を投入して探索を始めたが、画面に映るのは巨大な



米ミサイル原潜「オハイオ」。デッキには特殊任務用の機器を積む。映画「ミッションインポシブル/ファイナル・レコニング」でもこの原潜が登場した。＝米国防総省提供

カニばかりで、肝心のケーブルは見つからなかった。こうなると解像度の高い写真が頼りとなる。ただ、フィルムの現像は暗室を使う必要があり、その際に出る化学汚染物質を潜水艦の外に排気しなければならない。浮上すればソ連に見つかる危険が高まるが、それしか手がない。闇夜を選んで原潜は海面近くにまで浮上し、現像作業にあたった。カムチャツカ半島沖約70^キの地点で撮った写真の中に、海底に積もった砂が30^{センチ}〜60^{センチ}盛り上がる一筋の線が浮かび上がる1枚があった。ケーブルに間違いない。

ここからはダイバーの出番だ。120^{メートル}の深海に飛び出せば水圧で肺が押しつぶされかねないため、潜水艦内にある減圧室で体を慣らしてからダイバーは極寒の海に向かった。ほどなくしてケーブルへの盗聴機設置に成功する。

減圧室の様子は今年、封切られた米映画「ミッションインポシブル/ファイナル・レコニング」で主役を務めるトム・クルーズさんが、沈没したソ連潜水艦にたどりつくシーンで登場する。ご覧になった読者もいるかもしれない。

ダイバーたち水圧や寒さだけでなく、大型のタラとも戦った。鋭い歯を持つタラが腕にかみつки、それと格闘したこともある。時には「戦果」としてカニを潜水艦に持ち帰ることもあった。黄金の価値を持つ通信情報を少しでも多く聞き取ろうと、ハリバットはできるだけ長くこの海域にとどまった。

録音テープの解析はNSAがあたった。だが、当初は録音感度が悪く、特記するような成果を挙げられなかった。この作戦は米海軍史上で最も危険な作戦のひとつ。ソ連に発見されるような事態が生じれば、撃沈される可能性が高かった。仮にそうなった場合、残骸から暗号帳など極秘資料の回収を防ぐため、潜水艦には自爆装置が仕掛けられていた。乗組員全員が海の藻くずとなる運命にあった。

乗組員のリスクを下げながら、録音の品質向上も図れないか。米海軍はベル研究所の協力を得て長さ6呎の筒状の新型盗聴装置を開発する。ケーブルの上にかぶせるように置くもので、音質向上も見込まれた。ソ連が点検などのためケーブルを引き上げること想定し、その際は盗聴器がずり落ちて海底に残る仕掛けも施した。

「アイビーベル作戦」の成功に気をよくした米海軍の目はオホーツク海以外にも向かう。次の標的は、ソ連西部にある北方艦隊の拠点ムルマンスク周辺のバレンツ海だった。79年から盗聴器の設置作業が始まる。

盗聴した情報の中には、ソ連海軍の作戦や、米軍事戦略の見立て、それへの対処法などもあった。ソ連の最高司令官の思考法をさぐる情報もあり、米軍は、ソ連司令官の「心の中をのぞく窓」と位置づけた。

対ソ戦で少しでも優位な態勢を築こうと、米潜水艦部隊が決死の思いで情報収集を続ける中、70年代後半からソ連

の潜水艦部隊の行動様式に明らかな変化が現れ始める。まるで米国の手の内を読んでいるような行動が起き始める。

一つ目は、ソ連潜水艦の行動が大人びてきたことだ。以前は暴走族のように超高速の40ノットで爆音をとどろかせて航行していたが、音をできるだけ出さないよう、ゆっくりと航行するようになった。「静寂さが第一」と認識したような変化だった。

二つ目は、ソ連の潜水艦自身から出る音も目に見えて減った点だ。原子炉の振動などで生じる騒音が潜水艦外部に伝わらないよう、クッションをかませるなど細かい作業に務めた結果とみられる。東芝機械がソ連に不正輸出した工作機械を使って消音型のプロペラの製造が可能となったことも手伝い、静粛化がさらに進む。

79年に就役した「ビクター3」級原潜が静かな潜水艦のさがけとなり、83年に起工した「アクラ」級原潜でさらに静粛化が進む。ソ連の最新型原潜が出す音は米国の原潜並みとなり、SSUSをくぐり抜けてしまう潜水艦が登場するなど、米軍による潜水艦探知や追跡作業に困難が増していく。

三つ目は、米海軍が演習を実施する際、なぜか米国艦船よりも演習の様子を監視するソ連艦船が現場水域に先に着する現象が置き始めたことだ。

偶然が重なったのか。それともスパイしわざなのか。必

死に捜した答えが見つかったのは85年にウォーカーが逮捕された後だった。

ウォーカーは、S O S U S の存在を教え、米の原潜がソ連原潜の死角を利用して追跡していることなどを告げていた。米軍の暗号を読み解く鍵も渡していたため、ソ連は米軍の演習日時や場所などを事前に知ることができた。

ソ連は情報をもとに原潜の設計を見直し、行動様式も改め弱点克服を図る。ウォーカーは、米国が築いてきた優位性を1人で崩壊させてしまう役割を果たした。K G B は、ウォーカーを「史上最も重要なスパイ」と評価する。

だが、そのウォーカーをもつてしても「アイビーベル作戦」の存在は知らなかった。極めて一部の人間しか知らない極秘作戦だったためだ。

だが、「ソ連に漏れるはずがない」との確信が間違っていたと実感する事件が81年に起きる。盗聴器を仕掛けた海域に、大量のソ連艦艇が集まり海の底を探る様子を米軍の偵察衛星が捉えた。「作戦発覚の可能性が高い」と米海軍は判断し、作戦終了を決める。ただ、バレンツ海についてはソ連側に漏れた様子はないと判断して継続した。ソ連が崩壊した91年以後も続いた。

原潜ハリバットは76年に退役し、盗聴作戦は原潜「シーウルフ」や「パーチ」が後を継いだ。パーチは海底に着底しやすくするため、船底に引き込み式のスキー脚をつけた

スパイ原潜で、「ジェームズ・ボンド潜水艦」と呼ばれた。大統領勲章を9回受章するなど、米海軍史上、最高の業績を挙げ、海軍史に名を刻む。

「アイビーベル」の存在をソ連が把握したのは、N S A でソ連分析官として働いた経験があるペルトンがスパイ活動に手を染めたことがきっかけだった。

ペルトンは高校卒業後に米空軍に入隊、ロシア語を習得したことが評価され、N S A に移る。そこで暗号を学び、ソ連の暗号解読のための教科書を書くなど尊敬される人物に育っていく。

だが順調に見えた人生が突然、暗転する。79年4月、自宅を建てた際のトラブルで自己破産に追い込まれた。手持ちの現金はわずか7^{ドル}、銀行口座も8^{ドル}しかなかった。直後にN S A を退職し、さまざまな職につくものの長続きしなかった。そして、運命の日が来た。

80年1月14日夕、44歳だったペルトンは在米ソ連大使館に電話をかけ「ちょっと話したいことがある」と告げる。翌日午後には面会する約束を取り付け、翌15日午後2時45分にソ連大使館に入った。応対したのはK G B のウルチェンコ大佐で、ペルトンが持ち込んだ情報は本物と判断する。

それから3時間後の午後6時、ペルトンは大使館を出た。監視の目をごまかすため、大使館に入った際は蓄えていたあった顎ひげを綺麗にそり落とし、大使館職員を装って通

用門から外に出た。

ペルトンとロシアの会合は、すべて口頭での情報交換だった。その年の10月、ウィーンで4日間、ペルトンはしゃべり続けた。「アイビーベル作戦」も伝えた。ペルトンはNSA勤務時代にこの作戦に使う盗聴用機器の開発に携わったことがあり、極秘作戦を知っていた。

ソ連は翌81年にオホーツク海をサルベージする。提供された情報通りに米軍が仕掛けた2基の盗聴機が見つかった。その実物は「戦利品」としてモスクワの大祖国博物館に展示されている。ペルトンは逮捕されるまでの5年間、ワシントンで数回、ウィーンで2回、ソ連との会合を重ねた。合計100時間の面談で3万5000^{ドル}の報酬を手にした。

スパイのあたり年

ウォーカーとペルトンの2人の大物スパイが逮捕されたのはいずれも85年、イスラエル向けに長年、情報を横流ししていた海軍情報専門官ジョン・ポラードの逮捕を含め、1年間に8人のスパイが逮捕された。その年は米国では「スパイの年」と呼ばれる。

ウォーカー逮捕のきっかけは、10年以上も前に別れた妻バーバラの密告がきっかけだった。67年にスパイ活動を始めた直後に妻にスパイだと告白、デッドドロップと呼ばれ

る情報と報酬のやりとりをする現場に同行させ、共犯関係を築いていたことは前に触れた。

バーバラは84年11月23日、ボストンのFBIに電話をかけ夫を告発する。FBIは彼女を事情聴取したものの、聴取中にバーバラが酒を飲みながら夫のグチをこぼし続ける姿にあきれる。そもそも20年近く前の話をなぜ今ごろなぜ話すのか。事実であつたとしても、陪審員の説得は難しく、公判維持は難しいと判断して「追加捜査の必要なし」と記した。

だが、ウォーカーが居を構えるバージニア州ノーフォークのFBI事務所が、お蔵入りになりかけたこの事案に関心を寄せる。「デッドドロップ」などの記述が妙にリアルだと受け止めた。

FBIはバーバラだけでなく、陸軍勤務経験がある三女ローラを事情聴取すると、娘から「父からスパイに誘われた」との証言が飛び出す。ウォーカーの自宅で電話盗聴を続けると4月中旬、ウォーカーが息子の妻からの電話に「残念だがその週末は忙しい」と5月18日の卒業式への出席を断る会話をキャッチした。卒業式への出席を断るほどの「大切な用事」とは何だろう。疑念が膨らんでいく。

5月16日にはウォーカーの母から「あなたの大好きな叔母が亡くなった。葬儀は2日後の18日」と連絡が入る。だが、彼はこれにも「出席できない」と断りを入れた。18日

に何かがある。捜査官は6台の車と航空機を準備して追跡態勢を築く。

18日土曜日、ウォーカーは出かけたものの、スパイ活動で得たカネで買い求めたお気に入りのヨットで絵を描いて過ごした。張り込みは空振りに終わった。

翌19日も前日と同じ態勢で臨んだ。動きがない中、部下達から休日勤務への不満が漏れ始める。捜査主任は「午後1時まで動きがなかったら打ち切る」と要求を受け入れた。

捜査終了まであと1時間を切った午後0時10分、ウォーカーは家を出る。この日は、デッドドロップへの資料を投下する約束の日だ。資料の投下は夜になる。ワシントンまでのドライブは4時間ほど。もっと遅い時間に出ても十分に間に合うが、「その日の午後は、特に用事がなかった」ため早めに出発した。20万ドルを超す報酬が待っていると気がせいたのかもしれない。結果として、それが運の尽きとなる。

FBIはウォーカーの車を追跡したものの見失う失態を犯す。3時間ほど探し回り奇跡的に捕捉に成功、ウォーカーがデッドドロップに午後7時45分に袋を置き去る現場を視認した。直後に袋を回収すると、中から129件の秘密文書が見つかった。80件は「秘」、49件は「極秘」に指定された文書だった。

午後8時20分、同じ場所に外交官ナンバーをつけた青いセダンが止まる。3日後にナショナル空港から「逃亡」したソ連大使館に所属するKGB職員の手だった。

その夜、ウォーカーは滞在中のホテルで逮捕される。極秘資料を提供した原子力空母「ニミッツ」に勤務中の息子マイケル、兄アーサー、仲間の無線士の後輩、ジェリー・ウィットワースも芋づる式に逮捕された。ウォーカーは終身刑、兄は懲役365年の判決を受けた。

一方、ペルトンは、彼をスパイの世界に導いたKGBのユルチェンコ大佐に売られた。大佐は85年に米国亡命を申請、CIAの事情聴取に「元NSA職員がスパイ活動を続けていた」と告げた。FBIはペルトンの身元を割り出し11月25日に逮捕した。

終身刑3度という判決を受けたペルトンだが、模範囚だったため30年ほど刑期を務めた後、15年11月に仮釈放される。晩年には、近所の教会でオルガンを弾く姿もあった。22年9月、80歳でこの世を去った。

アリスが見た夢

冷戦終結後も、原潜の技術はスパイにとって格好的となる。20年代に入ってから原潜を舞台とするスパイ劇が米国で起きた。米海軍で原子炉部門に所属する技師とその妻で、今回もカネ稼ぎが目的だった。



「アリス」を名乗ったジョナサン・テビー夫妻。米原潜の秘密資料を売り払おうとした＝夫妻のインスタグラムから

動機はトランプ大統領嫌いにあった。熱烈な民主党支持者である夫妻は、20年秋の大統領選でトランプ氏が再選を果たせば「民主主義は危険に陥る」と真剣に考えた。もう米国に居たくない。海外移住を計画した2人は、原潜の秘密を売りさばいて資金を工面することを思いつく。

「アリス」と名乗る技師は20年4月、ブラジル宛ての小包を投函する。それが8カ月後の12月、FBIの出先機関に届く。扱いに困ったブラジル政府が手渡したと見られる。中から「下手な言葉で申し訳ない。同封した情報を貴国の情報担当者に渡して欲しい」と現地語でしたためられた手紙と、米原潜の秘密を伝える資料が出てきた。

FBIは海軍に問い合わせ、資料が「本物」と確認し、捜査に入る。まずはアリスが指定した連絡先にメールを送り「だいぶ月日がたったが、あなたの申し出はまだ有効か」と問いかけた。

返事が6週間後の21年2月に届く。アリスは、すべてを電子取引で済ませたいと提案、報酬支払いは国際テロ組織「アルカイダ」などのテロ組織が好んで使う仮想通貨（暗号資産）「モイネロ」を指定した。要求に従えば、容疑者特定や身柄確保は難しくなる。FBIはお互いが顔を合わさず取引できる「デッドドロップ」方式はどうだろうと提案する。アリスは、これを受諾する。

初取引は21年6月、ワシントンから車で1時間ほどの南



最新鋭のバージニア級原潜。ジョナサンは、この原潜の原子炉の資料も売った。＝米国防総省提供

部ウエストバージニア州の東部であった。アリスは車を受け渡し地点から2キロほど離れた駐車場に止める。約1時間後、車に同乗していた中年女性がデッドドロップに近づき、周囲を注意深く見回した後に合図を送る。アリスが近づき、白いポリ袋を置き立ち去った。

FBIは2人が駐車場を立ち去った直後にこれを回収する。中には食べかけのピーナツバターサンドがあり、パンの間に16ガバイトSDメモリーカードが収められていた。追加送金をする、SDカードを開くパスワードが送られてきた。中には、潜水艦用の最新原子炉の特徴など多くの秘密情報が詰まっていた。

FBIは車のナンバーから2人の身元を割り出す。男は、東部メリーランド州アナポリスの海軍原子力施設で働き、極秘情報に接する資格がある43歳（当時）の技師、ジョナサン・テビー、女性は、妻で私立学校教諭のダイアナ（45、同）だった。

2回目の取引は7月末、アリスことジョナサンは、今度はSDカードをバンドエイドの間に挟み、ジップロックに入れてデッドドロップに置いた。「同じようなファイルが50本ある。1本当たり10万ドルでどうか」と総額500万ドルの取引を持ちかけるメモも添えていた。FBIは10月、4度目の取引で2人の逮捕に踏み切る。

逮捕後、2人は15歳と11歳の子供たちは「まだ母親が必



会川晴之（あいかわ・はるゆき）

北海道大学法学部卒。87年毎日新聞社入社。盛岡支局、東京本社経済部、政治部、外信部、ウィーン特派員、欧州総局長（ロンドン）、北米総局長（ワシントン）、専門編集委員などを経て、2025年4月から客員編集委員。日米政府が進めたモンゴルへの核廃棄物計画の特報で2011年度のボーン・上田記念国際記者賞、毎日新聞連載「核回廊を歩く 日本編」で、16年科学ジャーナリスト賞を受賞。著書に「核の復権 核共有、核拡散、原発ルネサンス」（角川新書）「核に魅入られた国家」（毎日新聞出版）などがある。

要な年齢だ」と保釈を求めた。だが検察官は「子供たちのことを気遣うなら、2人は11歳の子供を自宅に置き去りにしてなぜ（FBIとの）受け渡し場所に向かったのか」と反論、裁判所はこの申請を却下した。司法取引の調整も進み、夫には17年半、妻に3年の刑を科す方向で調整が進んだ。だが、裁判長がある時から刑が「軽すぎる」と強硬姿勢に転じ不調に終わった。弁護士は、妻は従犯にすぎないと寛大な処置を訴え続けた。

22年11月にあった

判決の日、夫に懲役19年4月の刑が言い渡された。妻は、夫より重い懲役21年10月だった。裁判長はそれまで伏せていた衝撃の事実を明かす。

妻は収監中に「法廷で『妻は無実』と訴えて」という手紙を夫あてに2度書く。子供たちの元に早く帰るためだった。だが、証拠隠滅を防ぐため、2人は手紙のやりとりができない状況に置かれていた。

このため妻は、一計を図る。宛て先人不明の手紙が投函者に戻るシステムを悪用し、差出人欄に夫の名を記せば、夫に手紙が「返送」されると考えた。「読んだらトイレに流せ」とも書き添えた。だが、手紙は2回とも当局に没収される。裁判長は妻の隠蔽工作を厳しく指弾した。

原潜が技術の粋を集めた「王冠の宝石」である以上、スパイが狙う対象であり続ける可能性が高い。次回は、人工知能（AI）など新しい技術の発展により、原潜の価値が変わるかもしれない話に切り込んでいく。

〓 つづく